

陣構分校開校30周年歩みの碑

陣構という地名を聞けば、元弘3年(1333)に名和長年が後醍醐天皇を船上山に迎えた時、敵を防ぐための第1陣を構えたという言い伝えを思い起こす人もあるでしょう。昭和4年(1929)は世界恐慌の年、経済不況と同時に農村危機が深刻化した時代で、このような時、陣構に、光徳村から37ヘクタールの原野を借用して、10戸の開拓者が初めて入植しました。その後、経営難や社会情勢の変化から離農者が出て、戸数も減ったり、その跡地に入植した方もありました。



陣構分校の歴史を伝える「歩みの碑」

しかし戦後の緊急開拓入植者がおおよそ40戸あり、人口も耕地面積も格段に増えました。(林之峯開拓五十年記念誌)

昭和51年12月に建立された「陣構分校開校30周年 歩みの碑」の『碑文』には次のように記されています。

「陣構校区の誕生は遠く昭和初年に遡るが現在の規模に成したるは終戦後の入植による当時の生活の窮乏は言語に絶していたが子弟の教育も亦難事の一つであったそこで分校設置の要望は高まり先覚者の奔走努力の末 民家を借りて寺子屋式で開校は実現した 時まさに昭和二十一年十二月十一日であった

区民は困窮に喘ぎ乍ら分校整備に一致団結献身的な奉仕を惜しまず 斯くして昭和二十三年不備ながら校地と校舎を得た 昭和二十六年待望の電気導入を契機に 電話・水道・道路等環境は急速に近代化し これに呼応して校舎建築・校地拡張が成され分校と区民の一体化はより一層強化された

校下の営農基礎が緒に就くや 時を同じくして分校は設備の充実・教育機器の導入・教育内容の向上・環境の整備等その躍進に目覚ましき努力を重ねてきた

開校三十周年に当たり歩し跡を記し 以つて永く残さんとするものである」昭和60年の春、陣構分校は本校である光徳小学校に統合され、40年近くの歴史を閉じました。「陣構ふれあい広場」として地区のみなさんに使用されている跡地には、桜やモミ、プラタナスなどが大きく育ち、かつての子どものたちの声は今にも響いてきそうです。(名和町歴史研究会 金田 千義)

発掘現場から



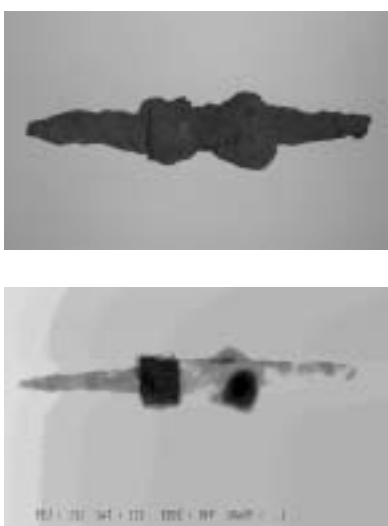
「こんなものも使います」

鳥取県教育文化財団埋蔵文化財センター 名和調査事務所

平成17年の初春です。明けましておめでとございます。昨年中に屋外で実施した発掘調査は終了し、室内で報告書を作成する時期となりました(報告書の作成内容については平成15年4月号参照)。

今回は報告書を作るときに利用する、ちょっと意外なものについて触れたいと思います。発掘調査によって見つかるもので最も数が多いのは、土器や石でできた道具です。これらは腐ることがないので残りが多いです。稀に、木や鉄でできた道具が見つかることがあります。木は虫やバクテリアによって食べられて、比較的短期間で形が崩れてしまいがちです。

鉄については堅くて丈夫な印象があります。私たちが周りにある水や酸素、土中の塩化物の影響で錆で覆われてしまい、元の形が分からなくなっていることがよくあります。その時に活躍するのがX線写真です。私たちが病院で写してもらったX線写真と原理的には同じで、鉄の製品でも鉄本体と錆部分はX線写真によって見分けることができるのです。



写真は、名和飛田遺跡から出土した、長さ約12センチの刀子(小型の刀)です。上段が通常の写真、下段がX線写真です。特に錆に覆われた柄のあたりの形がはっきりとし、錆びる以前の形が分かるようになりました。

X線写真が大きな発見につながった有名な例として、鳥根県の岡田山古墳から出土した鉄刀を挙げる事ができます。この鉄刀は、正4年に発見されていましたが、70年近く経った昭和58年に撮影したX線写真により文字が存在することが判明したものです。肉眼では分からなくとも、鳥取県にも同様の例が無いとは限らず、大発見が静かにその時を待っているかもしれないのです。

私の傑作コーナー

*印は新仮名

曙短歌会

山伏のほら貝耳に火渡す夫の供養の遍路の旅に 遠藤 定子
*華やきてステージに笑いを売る男幕の引かれて煙草をふかす 金田美彌子
秋日和の車窓に見ゆる人工雪 バスは山峡の湯の宿に入る 塩谷 峯子
くし柿に雨の日つづく軒下をバイク回収の声ひびかせて 角 公邦
無人駅のベンチに座せる老二人通りすぐ汽車見送りてゐる 角田 文子
*眠られぬままの一夜さ強風のときおり泣きときおり叫ぶ 寺井 悦子
「とつこいよ」と立ち上がる主婦振り向き笑へば皆も笑へるバスに 戸野 愛子
*自販機の上に太字で記される「煙草は心の日曜日」だと 二宮留美子
*「一度来よ」息子に招かれ丹波路をスポーツカーのスピードに酔つ 野口 律子
台風を生傷絶へぬ山肌の杉はさげびてたほれたらうか 森本 怜子

笹鳴句会

夕づくや小早に灯す冬座敷 逢坂 常盤
子の声の戸外に弾け小春かな 國谷 麗子
しまなみの吊橋またぐみかん狩り 砂口美二子
霜風の大山の裾煙立つ 津村 春水
日向ぼこ眼帯とれて夫といて 角田 久子
裸木を通す日ざしの冬座敷 橋本 昭子
白菜をどちらも抱え長話 宮川 節子
返り花狐が嫁にゆく雨か 美柑みつはる

みふね句会

チャリテイの小銭の音や日の短 秋山多喜子
宮紅葉氏が勇む杵の音 来海 忠満
魚市場あんこう鍋の旗立てて 国谷 耕川
高麗山に懸かりて冬の七日月 高島 満代
山の日にひそと甘える数柑子 津村 春水
お湯割の球磨焼酎や衣被 中川 幸宗
手作りの母の温もりちゃんちゃんこ 榎田 福女
老いの肩づらしてゐるやちゃんちゃんこ 松井 愛子
枯芒影なき影をこぼしけり 美柑みつはる